

柴扉抄

G 20サミットを前に
11・12の両
日、京都で
海外を含む
宗教指導

者、国際機関の代表者ら120人がG20宗教フォーラムを開催し、政府への提言をまとめた◆気候変動やAIの脅威と責任、生命科学と宗教、格差社会と貧困など、いずれも宗教者が避けて通れない8課題が論議されたが、注目されたのが「抑圧された人々とともに生きる」というセッション◆パネリストは中国・新疆ウイグル自治区出身の留学生モハメド・サウティ氏とチベット問題に取り組んできた僧侶の小林秀英師らで、少数民族への差別政策とその現状を報告した◆サウティ氏は来日以来3年、家族に累が及ぶのを恐れて一度も連絡したことはないという。監視社会で、どこに密通者がいるかわからないからだ。100万人のイスラム教徒が収容されている「教育施設」の一部では、人権問題にかかわる事態が起こっている◆チベット女性と結婚した小林師によると、自死を認めないチベット僧が、敢えて焼身抗議（焼身供養）をしなければならぬほど強圧と文化破壊が凄まじいという。命がけて実態を国際社会に訴える人。私たちは何ができるのだろうか。その真価が問われている。(兼)